

アクセントを大切に（作詞と作曲のかかわりをとおして）

福田 先生は、一体どのぐらいの童謡をこれまでに作りになられてるんでしょう？

渡辺 実を言うと、自分でもわからないんですよ。(笑) なにしる何百曲とつくっているものですから。たまに古い楽譜がでてくると、「あれ、これは私がつくったのか？」と思うこともありますよ。

小野 その中で、先生が一番気に入っているのはやはり「たきび」ですか？

渡辺 「たきび」や「ふしぎなポケットは」気に入っているというよりも、自然に耳にすることが多かったです

から、なんというか、身にしみてますよね。

渡辺茂氏 直筆の書

福田 ところで、作詞と作曲のかかわりについてお話していただけますか。

渡辺 童謡をつくるとき、作詞者と作曲者が、個人的に仲がいいという場合もあるんですけど、たいていは作詞は作詞、作曲は作曲で別々に進行する場合があります。

NHK の場合、作詞者と作曲者、NHK の担当者の三者で話しあいをするんですね。これが一番理想的でした。作詞者が、「こういう気持ちで詩をつくっているから、このところを強調して、メロディーにのせてほしい」とか、作曲者から、「これはアクセントが逆になるから作曲しにくい」といったりする。「蛙」と「帰る」ではアクセントの位置が違ってしまう？それを同じメロディーにのせるのは不自然ですからね。そういうところは作曲者の方から注文をつけて、詩の直せるところは直してもらいます。

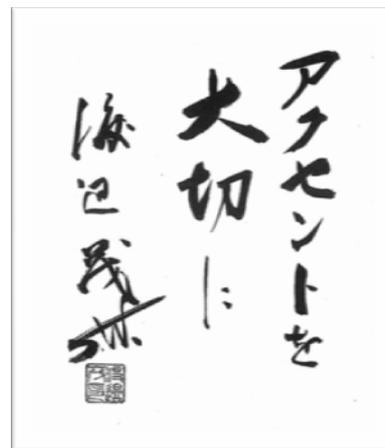
小野 作詞者の方に、詩の手直しをお願いするわけですね。

渡辺 もちろん詩人の方にはいやがられますけれどね。でも、歌いやすい童謡をつくるためだからと、説得するわけです。私は特にアクセントの問題に関して注文することが多かったんです。

先ほども言いましたが、「蛙」。家へ「帰る」。漫画が「買える」。同じ「かえる」でも違うわけですから。ぴよんぴよんした蛙だったら、「蛙」の印象をメロディーにのせたいわけです。気にしない人は平気なんですけども、私は非常に気になるほうですから。

「ちいさい秋みつけた」などの歌で知られる詩人でサトウハチローさんに、童謡研究会の講師として招かれたときも、「アクセントや字数などを考えて詩をつくってくれないと作曲の方が困ってしまう」とずいぶん話をしました。それまで、童謡の作詞の分野で、アクセントに関しては、あまり考えられることがなかったようです。

サトウハチローさんは、「いいことを聞いた、これからはアクセントに気をつけて詩をつくってみよう」とおっしゃってくださいました。実際、それからは字数はもちろんアクセ



トだとかニュアンスだとか、ずいぶん考えてくださったみたいです。

小野 サトウハチローさんと先生は、相性がよかったんですね。

渡辺 非常によかったんです。でも、彼のような反応は例外的でしたね。ふつうはすごくいやな顔されましたから。(笑)

まあ、詩人の立場にある人は、それだけのプライドを持っていますからね。でも、歌は歌われるためにあるわけで、その点からいえば詩が半分でメロディーが半分だと私は考えています。ですから、詩人には詩人の立場があるでしょうけれども、歌となったらメロディーがつきますから、メロディーにあうように詩人の方も考えるべきだと思うんです。童謡においては、詩と曲と、両方が仲良くしなくてはいけない、詩人だけが、「俺が俺が」とがんばったんではいい曲はつくれないと、ずいぶん言いましたね。

福田 先生の穏やかな人柄からは想像しにくいですねえ。

渡辺 やはり、童謡は作品として残るものですし、いいかげんな曲をつくって、心ある人を落胆させたくないですからね。そういう点で、作曲はこわいしきびしいものだと思います。ぜったいにいいかげんなことはできませんから。言葉を生かした作曲をする、というのは、私の昔からの信念なんですけど、作曲におけるさまざまな制約のなかでも、その信念を見失わずにやっていきたいと思っています。